

西勉・川谷紀宗(2018),「中学校特別支援学級における学びを豊かにする授業づくりー話し合い活動を取り入れた「作業学習」の実践研究ー」,広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第49集」,81-87.

中学校特別支援学級における学びを豊かにする授業づくり

ー話し合い活動を取り入れた「作業学習」の実践研究ー

西 勉 ・ 川谷 紀宗*

I. はじめに

「作業学習は、作業を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。」(特別支援学校学習指導要領解説ー総則等編ー平成21年6月:文部科学省)とあるように、特別支援教育では、生徒の社会自立を目指していく上で必要な力を作業学習の中で指導している。作業学習は、学校の設備や生徒の実態によって特色があり活動内容が多岐にわたっている。そのため形態として作業での活動を積み重ね経験していくことが多い。特別支援学校高等部では社会での自立をめざし、生徒のキャリア学習の中心的な学習として取り組んでおり、卒業後の生活にスムーズに移行できることを目指した内容を取り扱う場合が多い。また中学部においても高等部での作業学習につながるような、ものづくりを中心とした活動を行ってきた。生徒は、高等部を卒業すると何らかの形で社会に出ていくことになる。そのため中学校の段階から自分の将来を考えていくうえでも、意欲的に仕事に向き合い、働くことについて学び、「働くって楽しい」「働いてみたい」と思える経験をかせねていくことが大切だと考える。「中学部段階では心身ともに成長・発達の著しい時期であり、この時期にこれまでの自分を振り返り、今の生活が将来に続いていることに目を向け、将来の生活に対する夢や働くことに対する憧れの気持ちを持てるようにしていき、正しく、主体的に行動できる自分を実感し、他者から認められる経験を積み重ねることは、卒業後の「働く生活」の実現をするために重要である。」(菊地一文:2013)とのべられている。そのことから生徒が意欲を持ち主体的に行動し学習にとりくむ事ができる授業作りが重要であり、新学習指導要領でも取り上げられている「主体的・対話的で深い学び」を視点に持つことが大切であると感じている。そこで作業学習においても、ものを作る活動を行う中で関わりやコミュニケーションを通した思考を深める授業づくりをおこなうことが、自発的な意欲の高まりを育み自らの進路を考える力につながるのではないかと考えた。

II. 研究の目的および方法

1 目的

広島大学附属東雲中学校(以下、本校とする)での、作業学習にあたる「しごと」の取り組みを通し、働くことへの意欲を高める取り組みを行う。学習意欲を高めていくためには、自尊感情を高めていくとともに自己肯定感をそだてることが大切である。これまでの本校の取り組みの中で、自己肯定感を高めるためには、様々な体験を通して成就感や達成感を味わい他者から認められる中で自分への肯定的な気付きを促すことが大切である事がわかっている。これまでの作業学習では商品づくりを行う中で、正確さや丁寧に早くできることなどの技術を高めることで学習意欲を育てていくことが多かった。深い学びの実現をはかるためには、作業や実習など体験的な活動と知識を相互に関連付けてより深く理解できるようにする事が重要である。そこでこれまでの商品を制作する行程を中心とした学習に、何を作り、何を販売するのか、それぞれの段階で一人ひとりの考えを交流しあう場面として話し合い活動を加えることにした。生徒が関わり作りあげていく活動そのものが、生徒の思考を深め、意欲の高まりにつながる事ができるのではないかと考えた。

* 広島大学大学院教育学研究科

Tsutomu Nishi, Norimune Kawai

Creating lessons to enrich learning in junior high school special support classes : Practical study of active learning with discussion activities in "work learning"

2 研究の方法

本校の領域・教科をあわせた指導「しごと（作業学習）」（以下「しごと」）において，商品をつくりあげる活動を中心にしていき，自分たちが話し合い考えながら取り組む場面を設定してく。意欲の高まりの確認については，授業内の生徒の見取りを丁寧に進めるとともに，日々使う学習シートや言動を分析していく。

Ⅲ. 授業実践

1 期間と対象

本研究の期間は平成 27 年 9 月から 12 月の間に実施した。対象者は，本校特別支援学級（知的障害学級）生徒 4 名（1 年生 2 名，2 年生 1 名，3 年生 1 名）である。「しごと」は学年を越えた縦割り活動である。生徒の実態としては，経験の浅い 1 年生においては，経験が少ないことから作業に対してのイメージが持てないため，消極的になる場面も多いが，2 年 3 年と学年が進むにつれ，これまでの経験をいかし活動の進め方や販売についても見通しを持つことができていく。

2 授業実践の概要

(1) 単元について

本校の「しごと」の時間では，特別支援学級を 3 学年縦割りのグループで行っている。その中には，食品・クラフト・情報サービスの 3 つの作業種がある。生徒はそれぞれの作業種を学期ごとにローテーションして行う。また 3 つの活動の一つの会社「東雲コーポレーション」として取り組んでいる。そのため情報サービスは会社の一部門のような位置づけとして活動を行っている。授業は隔週 4 時間連続，午前中に行っている。学習単元計画については（表 1）に示す。情報サービスでの作業内容は主に，パソコンやタブレットを操作しイラストや文字の入力などを中心にした商品づくりを行っている。個々での作業が多く，協働で行う活動はあまり多くない。実際の作業場面に於いては，ソフトの操作についても基礎的な事は行うが操作の習熟に重きをおくのではなく，商品をつくりあげる活動を中心に，個々の生徒の実態に応じて，ソフトを使い分けることやタブレットを使用することで生徒が活動しやすいようにしている。そこで生徒間で商品について話し合う場面を設定してくことで，仲間とのやり取りを行いながら作業を進めるように指導した。

表 1 情報サービスの授業時数

| | |
|-------------|--------|
| 情報サービス | 全 25 h |
| PC を使った商品作り | |
| 活動目標をめる | 1 h |
| 商品開発 | 3 h |
| アイデアを出しあう | 2 h |
| 試作品の作り方を考える | 8 h |
| 試作品を実際に制作する | 10 h |
| 商品作り | 1 h |
| 東雲ショップ（販売） | |
| まとめ | |

(2) 授業実践の内容と生徒の様子

①活動目標づくり

この時間は，グループの活動の最初の活動になる。この単元でのグループ目標決めとリーダーを決定することを伝え，生徒らに任せ活動をおこなった。まずリーダーの決定から行うことになった。リーダーは 3 年生と 2 年生から立候補があった。2 年生の生徒は，はじめ「私はリーダーをやりたい。」と言っていたが，3 年生の生徒が「これまでの経験を活かして活動したい。」「3 学期は，卒業してしまうのでリーダーをすることができない。」などの話を伝えた。3 年生の話を聞くことで，2 年生の生徒は，2 学期はサブリーダーとして頑張り，リーダーをサポートすることを決意することができた。

目標決めでは，だれに何を作り販売するのかなどの視点を確認して話し合いを行わせた。生徒は 1 学期の反省や他のグループからのアドバイスをもとにし，それぞれの生徒が思いついた目標を付箋に書き出しあった（図 1）。それぞれが考えた目標の意味を確認しながら全体の目標を作っていく作業をおこ



図 1 付箋に書き出し，話し合いを行っている様子

なった。その結果,「お客さんのために,協力して話し合い,失敗を恐れずに仕事に挑戦する!!」に決まった。これは1学期に自分たちが食品加工において,お客さんを意識した目標で商品づくりをおこなっており,「協力する」についても自分たち反省の中で「みんなで協力」といった項目が挙がっていた。このことから自分たちのことを振り返りそれを活かした目標にすることができた。

②商品開発 アイデアを出しあう

どんなものを作って商品にしていくのかを考えていく活動である。ここでは,販売会の時期や,誰を対象にした販売なのかなどを確認した。商品開発の話し合いでは,これまでの商品サンプル等の提示も控えた。これはこれまでのサンプルを見せると生徒の意見が,それらの物に意見が引っ張られてしまうため最低限の情報を提示するのみとした。できるだけ生徒から販売したいものが沢山出ることを期待した。生徒らは意見をホワイトボードに書き出しながらその商品のイメージを伝え出し合っていた。(図2)写真立て,しおり,磁石,鉛筆,消しゴム,ノート,カレンダー,キーホルダー,ペーパークラフトなどが出てきた。これまでに販売した事もある商品だけでなく今までにない商品もあった。

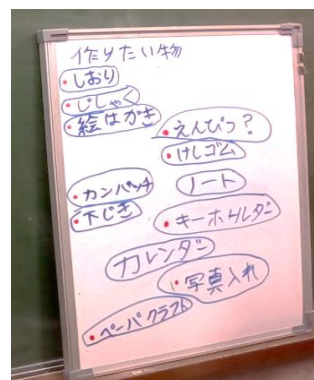


図2 書き出された意見

③試作品の作り方を考えよう

実際に商品化する前に試作品を作り検討することになった。そこでアイデアとしてだされた物について,作り方を確認していった。以前作ったものについては,なんとなく説明できる物もあったが,これまでに作ったことの無いものについてはパソコンを使って検索しようと生徒から意見がでた。そこでそれぞれの生徒に商品の作り方を調べる担当を決めた。全員でイメージを共有するために,調べた結果を説明していくようにした(図3)。その後,販売に向けて商品化できそうなものを「作りやすさ」や「材料」,「道具」などの視点を提示することで,生徒は焦点を絞りふり分けの話し合いを行った。そして試作品を作り実際に販売できそうなものを4種類に絞った。生徒らは一つひとつの作り方を確認していくことで,情報サービスのグループでつくるより,クラフトグループが作るほうが良いものがあることや,商品にすることが難しい物などがある事に気がついた。



図3 作り方を説明している様子

④ 試作品を実際に作ってみる

キーホルダー,写真立て,ノート,ペーパークラフトの試作をおこなった。(図4)できあがった試作品について感想をだしあった。そこではデザインや大きさなどを工夫していく必要がある事がわかった。また自分たちが作る時に難しいと感じた部分について他のグループにも見てもらい,作ってみた時の問題点についてアドバイスを貰うこともあった。商品化については総合的に判断していくことにした。試作品の中から商品化ができそうであり,お客さんが喜んで購入してもらえそうなものを選ぶことにした。すると生徒から「東雲ショップ(販売会)は年末なので来年のカレンダーがついている方が良い」「ノートだけの物よりもお客さんが喜んでくれる」といった意見がでた。それを受けて,生徒たちはカレンダー付のノートを作ることにした。またペーパークラフトについては,展開図が複雑なものにならなければ商品化が簡単のため販売することに決めた。

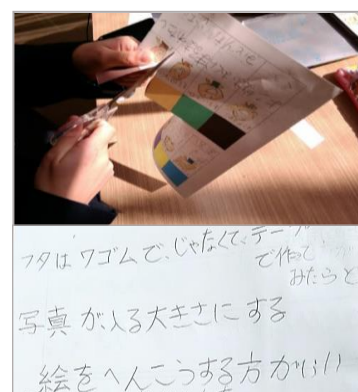


図4 試作品づくりと,試作品へのアドバイス

⑤ 商品作り

カレンダー付のノートのグループとペーパークラフトづくりに分かれて作業に取り掛かった。ペーパークラフトのグループでは、イラストを書くことが得意な生徒が中心になり作成することにした。作業内容や役割を明確にして活動した。1日の振り返りでは生徒を中心に改善点やその日の活動の気づきについて交流するようにした。よりよい商品にしていくために商品仕上げやラッピングも気を遣うような意見もだされた。(図5)



図5 商品化された商品 右側のペーパークラフトはラッピングされている。

⑥ 東雲ショップ(販売)

各授業の振り返りの時間に記入している作業日誌への記述を、本単元の学習内容ごとに、生徒のコメントをまとめ表にしたものが「作業日誌の生徒記述 一覧」である。(表2)

表2の「生徒の記述一覧」より、活動内容「目標を決める」～「試作品づくり」までの項目に対する生徒の記述については「話し合い」や「意見が言える」などのコメントが多くみられた。このことから生徒は話し合いの中で意見を交流していると実感できていることがわかる。本単元では商品開発を中心にして、自分たちがアイデアを出し、その試作品を作り、本当に商品として販売できるもの考えた。一方これまでの作業学習の活動とほぼ同じ内容である活動内容「商品づくり」の項目では、「丁寧に作業できた、集中して作業できた。」等の記述が多くなっている。これは生産を中心にした取り組みでは、自分の役割をはたし集中して活動する事が求められるため、このような記述が多くなる。本単元の振り返りにあたる「グループのまとめ」では「試作品を何回も作って、良い商品ができたことが良かった。」と、これまでの活動に対して肯定的な振り返りとなった。これは製品づくりを中心とした商品作りに、生徒の意見を反映させていくための話し合いを設定したことにより、「自分たちが作っている」と実感できたことが大きいと考えている。



図6 販売会と商品化された商品

IV. 結果および考察

1. 生徒の記述より

各授業の振り返りの時間に記入している作業日誌への記述を、本単元の学習内容ごとに、生徒のコメントをまとめ表にしたものが「作業日誌の生徒記述 一覧」である。(表2)

表2の「生徒の記述一覧」より、活動内容「目標を決める」～「試作品づくり」までの項目に対する生徒の記述については「話し合い」や「意見が言える」などのコメントが多くみられた。このことから生徒は話し合いの中で意見を交流していると実感できていることがわかる。本単元では商品開発を中心にして、自分たちがアイデアを出し、その試作品を作り、本当に商品として販売できるもの考えた。一方これまでの作業学習の活動とほぼ同じ内容である活動内容「商品づくり」の項目では、「丁寧に作業できた、集中して作業できた。」等の記述が多くなっている。これは生産を中心にした取り組みでは、自分の役割をはたし集中して活動する事が求められるため、このような記が多くなる。本単元の振り返りにあたる「グループのまとめ」では「試作品を何回も作って、良い商品ができたことが良かった。」と、これまでの活動に対して肯定的な振り返りとなった。これは製品づくりを中心とした商品作りに、生徒の意見を反映させていくための話し合いを設定していくことは、「自分たちが作っている」と実感することができた結果として現れている。

表2 作業日誌の生徒記述 一覧

| 活動内容 | 作業日誌の生徒の記述 |
|--------------------|---|
| 活動目標を決める | いけんをみんなが出せた。 |
| 商品開発 アイデアを出しあおう | 楽しみです。つぎをしたいです。 |
| | パソコンでしおりと写真入れ一生懸命探した。 |
| | キーホルダーの作り方をいっぱい見れたのが良かった。 |
| | 楽しくできたことです。 |
| 試作品の作り方を考えよう | 1年生がパソコンとタブレットを使って探していたのがすごいと思った。 |
| | 絵が入っている資料を作っている人がいてすごいと思った。 |
| | みんなで話し合って、できたことです。 |
| 試作品を実際に制作する | 絵が上手に書けた可愛いキーホルダーができた。 |
| | 仲間が真剣にせつめいしてくれたから。 |
| | 今日みんなで商品を決めたところが良かった。 |
| | みんなで意見を言えたことが良かった。 |
| 商品作り | ていねいにさぎょうできたこと。 |
| | 集中が切れている人がいた。 |
| | 丁寧に作業できた 集中して作業できた。 |
| | カレンダーの日を早く打てたこと。 |
| | 季節の絵を考えるのがむづかしかった。 |
| | 作るものの意見が言えたのが良かった。 |
| | 時間がかかったけど完成できた。 |
| | ライブをつくろう。かれんだーをつくりました。 |
| 東雲ショップ (販売) | 全部売れてよかった。早く売れてよかった。 |
| | カレンダーをつけたことで商品が売れた |
| | お客さんに喜んでもらえた。 |
| | もうちょっと商品説明をしたほうが良かった。 |
| | 商品をいっぱい作りたい。 |
| | 販売の支払いがちょっとむづかしかった。 |
| 全体を振り返って | みんなで協力して意見が言えたり、試作品づくりを何回もして、みんなで決めたことです。 |
| | もうすこし、商品説明をしたほうが良かった。 |
| | カレンダーを付けたことで商品が売れたお客さんに喜んでもらえた。 |
| | 今度は妖怪ウォッチが好きだけど見ないようにする |
| | 意見をいっぱい言えてペーパークラフトをきめました。 |
| | さぎょうをがんばりました。 |
| | 商品をもっといっぱい作りたいです。商品が可愛くできて売れたことです。 |
| | 商品開発の話し合いがみんなでした。 |
| グループのまとめ | 試作品を何回も作って良い商品ができたことが良かった。 |
| | 仕事が続かない人がいたのでさんねんだった。 |
| | たくさん試作品をつくり種類を増やしたほうが良いのができると思う。 |
| だれかに話したいことはありますか | 妹にみせてあげたい。(試作品づくり時) |
| | 試作品を作るものが決まったことをみんなに話す。(試作品づくり時) |
| | 小学生のともだちあげたいです。(試作品・商品づくり時) |
| | みんなに商品を買ってもらいたいと、はなしたい。(商品づくり時) |

西勉・川合紀宗(2018),「中学校特別支援学級における学びを豊かにする授業づくりー話し合い活動を取り入れた「作業学習」の実践研究ー」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 49 集」, 81-87.

作業活動を中心とした授業の中に話し合う場面を取り入れることで、生徒の意欲に効果があることが明らかになった。しかし単元内の場面に於ける話し合いの効果のちがいについて内容分析をするまでには至っていない。どの場面での話し合いが効果的なのか、生徒の発話がどのように関連しているのかなど明らかにしていく必要があると考えられる。これらを分析していく事で、より効果的な取り組みが可能になると考えられることから、今後の課題として取り組んでいきたい。

【 引用・参考文献 】

中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申），2011

菊地一文：実践キャリア教育の教科書ー特別支援教育をキャリア発達の視点で捉え直す，学研教育出版，2013